

NHK スペシャル「私は家族を殺した“介護殺人“当事者たちの告白」について

今回は少し暗い話になりますが、これを防ぐことこそ私達の役割であるとも言えますので取り上げてみました。

これはテレビドキュメンタリーで1ヶ月前の7月3日に放映されました。

日本は既に超高齢社会になっていて世界のトップランナーとしてお手本の無い未知の領域に突入していることはご承知の通りです。

今日本は介護疲れなどで2週間に1件の割合で身内をあやめてしまうということが何処かで実際起きているとのことです。 特別の許可を得て刑務所の中にまで入ったドキュメンタリーでした。

1件1件有り様は違うようですがある日突然誰にでも起きうる事だということでした。孤立していなくても短期間であっても起きうる事ということでした。

介護に従事している私達も、まずご本人の希望が第1、判断能力が無ければご家族の希望が第1 と思って行動しておりますが、ご本人が自ら殺してくれと希望してもそれはダメと直ぐ判るでしょう。しかしその当事者はこの1線を超えてしまうことがあるといいます。

その時代の社会の良識はどこにあるかと言うことを常に意識していても判断に迷うことは沢山あります。例えばエホバの証人の輸血拒否者に出血多量で死んでしまうからと輸血で命を救えば罪になってしまいます。親父本人の希望だからと言ってその通りにして死んでしまえば俺が殺したのでは無いかと自分の判断に後悔する方もいます。

一人一人価値観が違う多様性を受け入れる中で私達の介護という業務は、独断を避ける為にその内容の善し悪しは多職種協働で乗り切っております。

これからの介護社会は財源の問題から在宅療養を基本目標とすることはもう決まっています。私達老健の役割も基本目標は在宅療養支援であると決まっています。

そしてデイケアやデイサービスを受けて居ても介護殺人が起きてしまうと言うことは、通所リハ・ショートステイ・ロングステイあるいはレスパイトケア入所などがうまく組み合わせられないと本来の目標を達成できないということになります。

従来の介護のイメージから大きく逸脱しても良いので、当館の理念を実現するにはどういう介護がよいのか、もう一度原点に返って職員一人一人皆で考えてみましょう

老人保健施設一羊館の理念

利用者の方々すべてに尊厳・安心・満足を！

一羊館の行動指針

私たちは、保健・医療・福祉の架け橋のプロに徹します。

私たちは、利用者のQOL・職員のQOL・健全経営の3立を目指します。

私たちは、質向上のために日々の小さな工夫を忘れません。

